中国語母語話者と入声音

―「循環型社会をジゲンし」とは？―[1]

黒沢晶子（山形大学）
akuros@kdw.kj.yamagata-u.ac.jp

１．はじめに：中国語母語話者と入声音の問題

「ジュンカンガタシャカイヲ ジゲンシ...」という学習者の発話を聞いて、何を伝えようとしているか分かるだろうか。「循環型社会を」に続く「ジゲンシ」の意味は恐らく復元するのが難しいだろう。実は、これは「実現し」と言おうとしていたのである。

日本語を学んでいる中国語母語話者にとって、漢字の存在は、学習を容易にする半面、外国語としての注意が薄れやすく、発音や字形、意味用法に母語の干渉を受けがちであることが指摘されている。例えば、「国民」をコーミン、「実現」をジゲンと読み、「発」を「发」、「際」を「际」と表記し、「経済が高速に発展し」のように中国語の用法のまま漢語を用いるといったことがしばしば観察される。日中両言語で漢字を共有するメリットは、読解の速さなど、理解において著しいが、一方、口頭表現、文字表記、作文といった産出活動では、日本語として不適切な使用が少なくない。また、日中の漢字音・表記・漢字語彙に違いがあるということを学習者自身が十分に意識化していないことが多く、それこそが最大の問題だと言えよう。

このうち、漢字の発音・読みに関しては、これまでの研究で全般的な相違点や問題点が記述され、教材も作られている。しかし、「国」をコウ、「実」をジと読む類の問題は、北京語を母語とする学習者に、上級学習者であってもシステマティックに見られる誤用であるにも関わらず、試験にも作文にも表れにくいためか、これまで鈴木（1985: 84-85）などを除き、ほとんど注目されたことがない。「ク」「ツ」を落とす原因としては、北京語で「国」を guo²、「実」を shi²（右肩の数字は四声）と発音することから、日本語を音声化する際、母語の干渉を受けている可能性が挙げられる。また、これらの漢字が「国境」「実際」のように、後続音によっては、母音/u/が落ち、後続の子音と同化して、いわゆる促音化が起きることも、学習を複雑にしている一因だと考えられる。

この「国」「実」のように日本の字音で「ク」「ツ」で終わるものは、漢字の四声の一つ、入声に属する。入声とは、中国中古音で音節が内破音[p̚][t̚][k̚] で終わり、短く詰まった音調を持つもので、日本語では、下記のように、日本語の音韻体系に合わせて最後に母音を加え、フ(現代仮名遣いでウ)・チ・ツ・キ・クで終わる音として定着した。一方、北京語を初めとする現代中国語の北方方言では、音節末の[p̚][t̚][k̚] は失われており、これが日本語においても「ジゲン(実現)」のように母音終わりで音声化する問題の背景にあると考えられる。

[1] 本稿は、平成 21～23 年度科学研究費補助金(基盤研究（C))「中国語母語話者のための漢字音教材開発－入声音を含む漢語を中心に－」（課題番号：21520522）の研究成果の一部である。

中古音		日本字音	現代語(数字は声調)
十 zip	→	ジフ	shi 2
八 pat	→	ハチ	ba 1
六 liok	→	ロク	liu 4

本稿では、以下、2で入声音における促音化の規則性を概観し、3で中国語母語話者の入声音の問題、4で中国語の方言等に残る入声音と日本語学習者の方言使用調査について報告する。[2]

2．現代日本語の入声音と促音化

現代日本語で「キ」「ク」「チ」「ツ」で終わる漢字は、元来 k、t で終わる入声音だった。常用漢字（1981 年、1,945 字）中、「キ」で終わる字が適、激、石、赤、積など 38 字、「ク」で終わる字が国、確、学、作、百など 181 字、「チ」で終わる字が一、吉、日、八など 7 字、「ツ」で終わる字が実、活、決、結、月など 95 字あり、計 321 字にのぼる [3]。表 1 に示すように、入声 k 音の字は、通常、後続音が無声閉鎖音 k が後続して作られる二字漢語中でのみ「キ」「ク」の母音/i//u/が脱落し、「適格（tekkaku)」「学校（gakko)」のように促音化する。入声 t 音の字は、無声阻害音 k, t, s, h(p) が後続すると、「チ」「ツ」の母音が脱落し、子音が後続の子音と同化して「一階（ikkai)」「実際（jissai)」のように促音化する。入声 k 音に「百本」「六匹」「独歩」「北方」、入声 t 音に「七転八倒」等の例外はあるものの、ほぼ規則的な音変化だと言える。(黒沢 1994)

表１　入声 k、t 音の促音化

入声	例	後続音					常用漢字中	
		k	s	t	h(p)	その他	類例	字数
k	適　キ	適格	適性	適当	適法	適応・適度	激、石、積、敵	9
	学　ク	学校	学生	学長	学費	学内・学問	確、国、作、特	79
	百　ク	百回	百冊	百通	百本	百円・百聞	独、北、六	
t	一　チ	一階	一足	一致	一方	一度・一応	吉、七、日、八	7
	実　ツ	実験	実際	実態	実費	実現・実用	結、出、絶、発	94

しかし、二字漢語の語中に見られる上記のような音変化は、複合語・派生語の構造上の切れ目に入声 k、t 音が来たときには異なる様相を見せる。「別」を例に挙げると、

（A）「別室（べっしつ)」のような二字漢語では、●○の●の位置にある「ツ」の母音が脱落するが、

（B）○●・○型の構造を持ち、●の位置に「別」の来る「特別室（とくべつしつ)」では「ツ」の母音は無声化するに留まる。これに対して、

（C）●・○○型の●に「別」の来るものは、Bより後続部分との熟合度が高く、「別世界（べっせか

2 入声音の読みに関する学習者調査については、紙幅の関係で、稿を改めて報告したい。

3 日本語の字音が「ク」と「ツ」のどちらでも終わるものについては、次のように分類を行った。「匹」は慣用音ヒキでなく、「匹敵」「匹夫」などに現れる漢音ヒツによって「ツ」で終わる字に分類した。「冊」は慣用音サツでなく、「短冊」に現れる漢音サクにより「ク」で終わる字に分類した。一方、「喫」には呉音キャク・漢音ケキがあるが、一般的でないため、「喫茶店」に使われる慣用音キツにより、「ツ」で終わる字に分類した。

い)」のように母音が脱落するものと「別行動（べつこうどう)」のように無声化するに過ぎないものとが相半ばする。(黒沢 1995)

さらに、入声音には、k、t で終わるもの以外に、p で終わるものがあったが、p 音は日本語に入ると、次第に唇の合わせ方が弱まっていき、和語の「買ふ」が「買う」へと変化したように、「ウ」で終わるようになる。十、合、入、法、立；急、給、協、業、集などがこの入声 p 音に当たる。ところが、現代日本語の字音で「ウ」で終わるものには、入声以外の上声・平声・去声の字も多い。九、休、究、球、求；弓、宮、窮 などがそれである。この二者は現代仮名遣いでは見分けがつかないが、歴史的仮名遣いでは、入声 p 音は「フ」で終わり、非入声音の場合は「ウ」で終わっている（例：「九」キウ）のが目印となる。[4]

入声 p 音の字には、「フ（ウ)」で終わる以外に慣用音として「ッ、ツ」を持つようになった字（「十」ジッ、「合」ガッ、「立」リツ、「雑」ザツなど）がある。両唇音「フ」で受け入れた入声 p 音の字に無声阻害音 k, t, s, h(p) が後続することによって母音が脱落し、「ッ」となる（例：合掌)。このような語が使用頻度の高いものであった場合、「ッ」とそれが開音節化した「ツ」が慣用音として定着した。表 2 に示すように、この慣用音は、入声 t 音と同様、無声阻害音の前で促音の形をとる一方、「フ（ウ)」で終わる字音の場合は、同じ環境でも促音化はしない。

表 2　入声 p 音の促音化

例	字音		後続音					常用漢字中	
	新仮名	旧仮名	k	s	t	h(p)	その他	類例	字数
十	ジュウ	ジフ	十九	十七		十八	十枚	甲、雑、執、拾、入、納、法	9
	ジッ		十階	十歳	十通	十本			
合	ゴウ	ガフ	合格	合成		合法	合理的		
	ガッ			合唱	合点	合併			
立	リュウ	リフ					立米	圧、湿、接、摂	5
	リツ		立夏	立食	立体	立派	立案		
急	キュウ	キフ	急行	急速	急転	急変	急用	急、給、協、業、習、集、答	32

常用漢字入声 p 音 46 字中、慣用音のない「急」タイプが 32 字あり、現代日本語の p 音字が促音の形をとることは限られた範囲でしか起こらないことがわかる。次に、「合」のように、「フ（ウ)」と「ッ、ツ」が無声阻害音の前でどちらも成立し、ほぼ同等の熟語の生産性を持つものが 9 字ある。これらは、日本語教育上は、規則としてではなく、単語ごとに覚えたほうが実用に即していると言える。さらに、「立」「圧」のように、無声阻害音の前では慣用音「ツ」しか使われないものが 5 字ある。「立」タイプの字は、「フ（ウ)」の熟語が一般的でないため、事実上、入声 t 音と同じ扱いをすることも可能である。(黒沢 1996)

4　現代日本語の字音には、ここまでに挙げた「キ」「ク」「チ」「ツ」「ウ」のほかには、「イ」「ン」で終わるものがある。[例] イ：係、計；軽、経　　ン：院、員、山；飲、陰、三

３．問題の類型と原因

１で触れた中国語母語話者の入声音の問題には、次の４つの類型がある。

(1)　促音化しない環境で「キ」「ク」「チ」「ツ」を落とす：　最も顕著

例：適正 テーセー　　爆発音 バハツオン　　遠足 エンソ　　室外 シガイ　　上述 ジョージュ

(2)　促音化しない環境で促音化する　　例：述語　ジュッゴ

(3)　促音化すべき環境で促音化しない　例：　物体　ブツタイ　　一回　イカイ

(4)　入声音でないものに「キ」「ク」を付ける過剰一般化

例：固定　コクテイ　　情勢　ジョーセキ　　負担　フクタン　　白書　ハクショク

これらの例は、会話、口頭発表、文章の音読などの際に出てきたものである。

(1)は、最もよく見られるもので、読みに迷ってではなく、ためらいなく入声音を母音終わりで発音する様子から見て、学習者はこれらの文字を見たり頭に浮かべたりしたとき、無意識に母語の韻尾が口をついて出てきたのだと思われる。北京語などの現代北方方言では、入声は平声・上声・去声と混じり、母音終わりになっているため、これらの方言の話者が母語の漢字音から日本語に残る入声音を類推することはできない。学習し、よく知っている単語なら記銘された日本語の字音が再生されるが、そうでないものは、頭の中で母語の音で登録されているのかもしれない。「中国」と言うとき、「ク」を落とすことはないのに「国民」が「コーミン」となったり、同じ学習者が「積極的」は「セッキョクテキ」と言える一方、「太極」は「タイキョ」と言ってしまったりするのを見ても、音声を含めた単語への親密度が字音の再生に反映されている可能性が高い。また、「爆発音」の「ハツ」は正しく「ツ」を付けているのに「爆」が「バ」となっているのは、この学習者にとって、「爆」と「発」二字の日本語における親しみの度合に差があることを示している。

(2)は台湾出身の学習者の誤用だが、「述語」（ジュッゴ）のように促音化しない環境で促音化させているのは、台湾語の「述」が [t̚] で終わることによる干渉なのか、「出席」「実際」などからの類推による促音化の過剰一般化なのかは不明である。台湾語の干渉だと言い切れないのは、４で述べるように、台湾出身者にも(1)に属する誤用が少なからず見受けられるためである。

(3)には、二つの異なるケースがある。「物体」（ブツタイ）は、「ブツ」という字音そのものは記銘されているが、いつ「物」を促音化させるか分かっていないケースである。これに対して、「一回」（イカイ）は、(1)同様、中国語の yi という音が無意識に出てきたものと見られる。つまり、前者の誤用の原因は、促音化の規則が獲得できていないことにあるのに対し、後者の誤用の原因は、それ以前に母語の干渉だという点で(1)と同じものだと言える。

(4)の過剰一般化も、北方方言から入声が失われているため、類推がきかないことに遠因があるという点で、(1)と表裏をなす関係にある。(1)と違うのは、日本語の字音には「キ」「ク」で終わるものがあり、それは中国語で母音終わりのものだということまでは認識していることだが、標準語では、負も服、福、副、腹も fu で、見分けがつかない。したがって、日本語で音声的にそれほどなじみのない単語だと、日本語でも母音終わりでよいのか、それとも「キ」「ク」を付けるべきなのか、分からなくなるのではないかと推測される。このとき、たとえば「白書」という文字を見て、「図書館」のようになじみのある語から「書（ショ）」という字音を導き出すことができそうなものだが、そうしないのは、(1)で挙げた「国民」や「太極」の場合と同じである。母語や熟達した外国語なら、「書」や「極」を単独で見ても、自動的に音声化できるだろう。また、ある程度熟達してくれば、「書」を見て即座に「図書館」を思い出し、そこから「しょ」という音を引いてくることができるようになる。「白書」や「太

極」などで持っているはずの知識を十分活用できずにいるのは、このような単語の音声と単漢字の音声のネットワークがまだ十分に形成されていないためだと思われる。

なお、常用漢字のうち、入声は計 367 字で、常用漢字全体の約５分の１だが、入声音を含む語彙の比率は、それよりも高い。（旧）日本語能力試験出題基準にとりあげられた１～４級語彙のうち、カ行で始まる漢語を見てみると、1,131 語中の 374 語、すなわち３分の１余りの語が入声音を含んでいることがわかる。この比率からも、入声音を含む漢語が正確に読めることは、コミュニケーション上も大切なことだと言えよう。冒頭で挙げたように、「循環型社会をジゲンする」と言ったのでは、日本人にすんなりと理解してもらえないからである。

４．方言に残る入声音と方言使用調査

入声は、現代中国語の北方方言では失われたが、呉語（上海語・杭州語・衢州語等）・広東語・台湾語等の方言、および朝鮮語、日本語などには残っている。表３は、これらの言語における入声音の韻尾を対比したものである。北京語はピンインで、上海語・広東語・台湾語・朝鮮語については、韻尾のみ音声記号で示してある。[p̚][t̚][k̚] は内破音、[ʔ] は声門閉鎖音を示す。[5]

表３　中国語の方言等に残る入声音

入声	漢字	日本語	北京語	上海語	広東語	台湾語		朝鮮語
k	**適**	テキ	shi 4	ʔ	k̚	k̚		k̚
	国	コク	guo 2	ʔ	k̚	k̚		k̚
	拍	ハク	pai 1	ʔ	k̚	k̚	ʔ	k̚
t	**一**	イチ	yi 1	ʔ	t̚	t̚		l
	実	ジツ	shi 2	ʔ	t̚	t̚		l
	発	ハツ	fa 1	ʔ	t̚	t̚		l
	熱	ネツ	re 4	ʔ	t̚	ʔ		l
p	**十**	ジフ	shi 2	ʔ	p̚	p̚		p̚
	合	ガフ	he 2	ʔ	p̚	p̚	ʔ	p̚

さて、方言に入声が残っているなら、これらの方言を母語とする日本語学習者は日本語の字音の発音に類推が利き、有利に働くのではないだろうか。もし方言字音の知識があるなら、それを活用できないだろうか。このことを確かめるために、本研究では、次の調査を行った。

(1)　方言字音調査（台湾語・呉語）：実際の発音を録音して確認

(2)　方言母語話者への方言（台湾語・呉語）及び標準語使用に関するインタビュー

4-1.　呉語（上海語、杭州語、衢州語）の入声音・方言使用調査

呉語は、江蘇省南部と浙江省の大部分、及び上海などを中心に約 8,700 万人が話す、北方方言に次ぐ第二の方言である。発音上の特徴に閉鎖音・破擦音の三項対立（有気音、無気音、弛緩音[6]）がある

[5] 声門閉鎖音は、日本語で「あっ」と言ったときの「っ」の音に当たる。

[6] 弛緩音（slack voice）の呼称は Ladefoged & Maddieson (1996:64-66) による。唇音を例にとると、無声有気音

ことでも知られる。

侯（1998）、丁（2003）等、既存の録音資料・文献を参考に各方言で共通して使われている入声の漢字を抽出し、上記の方言字音をそれぞれの母語話者各 1 名から採取した。録音したのは、20 代から 30 代の若い世代（主として留学生）である。文献にあっても本人がその字を含む語彙を使わない、その字の方言音を知らないという場合は、できるだけ同じ韻母で、方言音がわかる別の漢字に変更した。録音後、杭州語・衢州語話者には、方言と標準語をどのように使ってきたかについてインタビューを行った。方言とインフォーマントは、次の 3 名である。

・杭州語　21 歳・女　浙江省杭州市生まれ。高校卒業まで杭州市、大学から北京市に住む。
・衢州語　22 歳・男　浙江省湖南鎮破石村生まれ。13 歳まで同村で育つ。13～19 歳、村からバスで 1 時間の浙江省衢州市に住む。大学（19 歳～）は吉林省長春市
・上海語　33 歳・女　上海生まれ、上海育ち、上海市在住。

録音　入声音 47 を録音した。たとえば「法・ 雑・ 若・ 石・ 殺」は、元の入声韻尾は、それぞれ、p、p、k、k、t だが、上の三つの方言では、すべて声門閉鎖音 [ʔ] になっていて、相互の区別がない。

ただし、「巴」[pa] と「八」 [paʔ] のように母音で終わる非入声音と声門閉鎖音で終わる入声音を対比させると、杭州語・衢州語ともインフォーマントは識別できる。

このことから、呉語字音の知識のある日本語学習者については、次のように言えるだろう。現代呉語で、入声音は韻尾を持つが、k, t, p の区別が失われ、声門破裂音[ʔ]に統合されているため、日本語字音の促音化の有無に関して、全面的に母語の知識に頼ることはできない。しかし、北方方言話者に較べれば、入声か否かの判断が母語方言から類推できる点が強みとなる。

インタビュー　杭州語・衢州語のインフォーマントは、家族・親戚（祖父母、いとこ）とは呉語で話す。小学校では友人と呉語で話したが、中学高校では通う学校によって方言の使用頻度が異なる。地元出身の生徒が多い学校なら、専ら呉語で話すが、学区が広く、他の地域からの生徒が混在している学校だと、方言の通じない級友がいるため、日常使う言語も北京語が増えていく。学校の教室での使用言語は小学校から標準語である。しかし、小学校では授業外は先生も方言で話していた。また、高校のときの先生の一人は、標準語の反り舌音が発音できなかった。 大学（北京、長春）では、友人とも標準語で話している。杭州語でのインフォーマントは、今、杭州語で話していると、ときどき単語を忘れて、標準語を混ぜて話すことがある。また、杭州語は主に音声言語として使うだけである。中にはブログを杭州語で書いている友人もいるが、音だけ借りて漢字を使うため、見ただけでは意味がわからない。発音してみて初めて理解できる。

以上のインタビューと録音時の様子からは、次のことがわかる。若い呉語方言話者は、音声言語としては比較的、方言を維持しているが、普段それを文字化しないため、漢字を見て瞬時に呉語の発音が想起できるほど、文字と音との結びつきは強くない。その漢字を含む熟語を思い浮かべて、単語から単漢字の音を導き出している。したがって、日本語字音学習に母語の知識を活かすには、多少なりとも意識的な訓練が役立つのではないかと思われる。

---

p^h, 無声無気音 p に対する b を、弱い帯気を伴う有声音とする立場をとらず、閉鎖中は無声で破裂後、有声の穏やかな息洩れが認められるとしている。従って、音声記号は b の下に無声を示す補助符号（ ̥）が付く。

4-2. 台湾語の入声音・方言使用調査

録音とインタビュー　侯（1999）に基づいて台湾語で使われている入声の漢字を抽出し、その字の方言音を知らない場合は、できるだけ同じ韻母で、方言音がわかる別のものに変更した上で、72 の入声の台湾語字音を下記の母語話者１名から採取したあと、インタビューを行った。[7]

26 歳・女　台湾北部の新竹出身。大学は同じく北部の桃園にある。

このインフォーマントは、家族、特に祖父母との会話に日常的に台湾語を使っており、北部出身の若い世代としては、方言をよく維持していると言える。以下はインタビューの内容である。

台湾語しか話さない祖父は孫の自分の名前を呼ぶにも台湾の発音で呼ぶ。標準語で書かれた新聞を読み、その内容について話すときは、台湾語を使う。その際、政治家の名前などの固有名詞も台湾語の発音で言う。両親が小学校に通っていたころ（1960 年代）には学校で台湾語を話すと体罰や罰金があった。自分が小学校に入ったときには、皆普通に標準語で話すことができ、体罰もなかった。現在は、自分たちの文化を大切にしようという政府の方針で、８歳の姪は小学校で台湾語を習っている。

表４に録音した入声音の例を示す。

表４：台湾語の入声音例（韻尾対照）[8]

p̚	t̚	k̚	ʔ
	質　tsit	燭　tsiok	折　tsiʔ
十　tsap	実　sit	熟　siok	

台湾語の入声音は、呉語と異なり、韻尾の内破音[p̚][t̚][k̚] の別がかなり保たれているものの、呉語同様、元の入声音に関わらず、声門破裂音 [ʔ] が生じたものも少なくない。（「合」「熱」「拍」等。表３参照）[9]　これら[p̚][t̚][k̚] および [ʔ] について、母音で終わるものとの違いがあるかどうか日本語母語話者の耳で聞いてみると、[p̚][t̚][k̚] で終わるもの 33 のうち 29、声門破裂音 [ʔ] で終わるもの 39 のうち 15 が短く詰まる、日本語の促音のカテゴリーに入る音に聞こえた。それ以外は促音のカテゴリーには入らないが、母音終わりのものに較べ、やや喉頭に力が入っている。[p̚][t̚][k̚] [ʔ] のどれで終わるかは侯（1999）の分類によるが、この話者が母音終わりに近い発音をした[t̚]の４つは、声門閉鎖音 [ʔ] になっている可能性がある。[10]

また、唇を合わせる [p̚] は、耳で聞いたときにその調音のしかたがはっきりわかるのに対し、[t̚][k̚] は歯と軟口蓋のどちらなのか分かりづらく、区別がつかない。これらのことから、次のことが言える。

① [p̚][t̚][k̚] [ʔ] のどの音で終わるものも、入声らしさが失われた字音を含むため、話者自身に非入声音と区別がつかない場合がある。

---

7 台北出身の日本語学習者にもインタビューを行ったが、このインフォーマントは台湾語があまり話せないため、方言字音の録音はしなかった。

8 音声記号は侯（1999）に基づく。

9 台湾語音には読書音と俗音があるが、中澤（2010a）によれば、俗音に[ʔ]が多いという。これは、『日台大辞典』（1907）収録の「日台字音便覧」のデータベース作成中の報告による。「日台字音便覧」では、「末　ボァッ　ボァ」のようにカタカナで台湾語音が写されており、この場合、「ボァッ」が読書音で韻尾[t̚]、「ボァ」が俗音で[ʔ] に相当する。[p̚]は、小文字のプ、[k̚]は小文字のクで表現されている。

10 有坂（1936: 5-7）は、台湾語の[p̚][t̚][k̚]は、ほとんど聞こえず、聴覚印象からは kib, kid, kig（b, d, g は無声）に近いとし、その次の段階で入声韻尾が声門閉鎖音になり、やがて消失していった過程に位置づけている。

② [t̚][k̚]で終わるものは、話者が入声音だとわかっても、[t̚][k̚] のどちらか区別がつかない可能性がある。しかし、これについては、再調査が必要である。

③ 入声[p̚]音が維持されているものは、[p̚] であることがわかりやすいが、日本語のほうで、促音化に [t̚][k̚] のような規則性がない。そのため、[p̚] の字だと分かっても、それが促音化するかどうかについては、個別の知識が必要となる。

④ 台湾語字音の知識のある日本語学習者は、入声音を認識してそれを日本語字音の学習に活かせる可能性がないわけではないが、全面的にその知識に頼ることはできない。

録音したインフォーマントと異なり、同じ台湾出身でも、初見でほとんど方言字音を思い出せない者もいた。祖父母とは少し台湾語で話すが、両親とは標準語だという。若年層にとっても方言が日常の言語である台南、台中と異なり、台北では、大学に通う比較的裕福な層ほど台湾語を使わなくなっているという（中澤信幸氏談）。

台湾出身の学生の誤用例には、「適正」（テーセー）、「室外」（シガイ）、「失業者」（シギョーシャ）など、北方方言母語話者と同じように「キ」「ツ」を落とすものが珍しくない。一方、「述語」（ジュッゴ）のように促音化しない環境で促音化させているのは、台湾語の「述」が [t̚] で終わることによる干渉でないとは言えないが、「出席」「実際」などからの類推による過剰一般化である可能性も残る。

このような方言の不使用や標準語の干渉が原因と思われる誤用がある点を①～④に加えれば、方言字音の知識を日本語字音の学習に活かすという当初の計画は、実際には、それほど簡単でないことがわかる。しかし、呉語話者同様、少なくとも非入声音との区別がつく字については、その知識が活かせると言える。

4-3. 方言字音・方言使用調査　まとめ

中国語の方言には入声音を残しているものもあるが、日本語字音の学習に活かせるだろうか。方言字音調査の結果、若い世代では、維持の度合いに地域・個人差があることがわかった。また、入声音は、呉語（上海・杭州・衢州）ではどの音も韻尾が声門破裂音となっており、一方、台湾語では、かなり区別が残っているものの、日本語字音の学習にそのまま活かせるほど完全ではないことが明らかになった。このほか、方言は通常、文字で表さないため、文字面と字音がすぐには結びつかないことも考慮に入れた上で、非入声音と入声音がかなりの程度識別できるという方言の知識が日本語学習に活かせるよう、教育上の工夫をする必要がある。母語の入声音と日本語の入声音との関連性に気づかせることがその第一歩だろうか。

５．おわりに

方言知識の有無にかかわらず、入声音の字音への母語の干渉・過剰一般化の克服には、生の日本語の音声に数多く触れること、文字面から意味を理解して事足れりとせず、音に敏感になること、そして、日本語の字音は母語の字音と異なるという認識を持つことが欠かせない。 今後、漢字音教材の作成に当たって、豊富な例によって耳と感覚を養えること、音声を活用すること、日本語の字音は母語の字音と異なるという認識を促すことを基本方針とするとともに、入声音を残す方言の話者には、その知識が日本語字音を類推するヒントとなるように工夫していきたい。

参考文献

有坂秀世 1936　入声韻尾消失の過程.『音声学協会会報』41 号：5-7.

小川尚義編 1907 『日台大辞典』台湾総督府.（国立国会図書館近代デジタル・ライブラリーで閲覧可 http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/869489）

黒沢晶子 1994　漢字音における母音の脱落現象と教え方.『第 7 回日本語教育連絡会議発表論文集』: 84-92.

黒沢晶子 1995 「別室」と「特別室」に見る音変化の規則性.『第 8 回日本語教育連絡会議発表論文集』: 56-64.

黒沢晶子 1996　入声 p 音・音便に見る音変化.『第 9 回日本語教育連絡会議発表論文集』:98-104.

侯精一主編 1998 『杭州話音档』上海教育出版社

侯精一主編 1999 『台北話音档』上海教育出版社

鈴木義昭 1985　漢字系学生の授業と実際.『講座日本語教育』21. 早稲田大学語学教育研究所.

丁邦新編著 2003 『一百年前的蘇州話』　上海教育出版社

中澤信幸 2010a 日本漢字音・台湾語音の対照と東アジア共通語彙の可能性. 山形大学第 10 回言語学フォーラム（口頭発表資料）.

中澤信幸 2010b 『日台大辞典』付載「日台字音便覧」について.『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第 7 号. 154-162.

藤堂明保 1957 『中国語音韻論』江南書院

藤堂明保 1969 『漢語と日本語』秀英出版

Ladefoged, Peter & Maddieson, Ian (1996) *The sounds of the world's languages*. Blackwell.